150年の伝統が裏打ちするクリアな思考の解像度



千葉県立千葉中学校 ［千葉県千葉市］

1878年創立の千葉県立千葉高等学校・千葉中学校（以下、県千葉）はじきに創立150周年を迎える。県下最古の歴史と屈指の進学実績を誇り、2008年の併設中設置後は6ヵ年一貫の深い学びを推し進めてきた。徹底した自律の精神と高度な授業、そして個性を尊重する独自の校風のなか、生徒たちはいかに自らの可能性を伸ばしているのか。その現場に迫る。

取材・文／鈴木隆祐　写真／松沢雅彦　鈴木隆祐　デザイン／上野昭浩

自分自身を語れる言葉を持つ生徒像を理想に

県千葉に今年4月に着任した増田武一郎校長は、直前まで3年間、県教育委員会で教育政策課副参事や学習指導課長を務めていた人物だ。

「校長職は我孫子高校以来、3年ぶりです。行政は仕事の目線が大きく、幅広く物事を見ますが、現場に来てあらためて思うのは、教育という現象が起こっている場所は教室の他ないということ。教室での学びをどう捉えるか、という具体的な解像度がないと、いくらマクロの仕事をしても理解されない。マクロとミクロ、双方の視点を持てたのは本当に良かったと思っています」

香取市（旧・小見川町）出身の増田校長は、県東部や南部の過疎化、そして東京という巨大な磁場に人や学校が吸い寄せられていく県内の現状を、肌感覚で知悉している。

「千葉の地理的な最大の特徴は、東京の隣にある大きな半島だということです。元々生まれ育った北総地区の香取や小見川などは人口減少が著しく、同じことが南部の安房地区にも言える。半島の端から人がいなくなり、高校の存立すら危ぶまれる現実がある。最終的に倍率が出るのは東京に近い学校ばかりで、この千葉市においてすら危機感を感じることがあります」

早稲田大学大学院で中国近代におけるジャーナリズム史を修め、国語教諭として歩んできた増田校長。県下最古の歴史を誇る名門の重責を担いながらも、その語り口に気負いやためらいは一切ない。

「千葉県中から優秀な生徒が集まってくる中で、自分より優れている者を見ても折り合いをつけたり、自身を許したりする過程は成長に欠かせない。その時に大事なのは親からの精神的な自立です。自分の心情をきちんと言葉にできるか、身近な大人とどんな言葉のやり取りができているかが問われています」


今年度着任したばかりの増田校長。県教育委員会で培った広い視野を携えつつ、今は生徒一人ひとりが学ぶ教室に目を注ぐ


中1理科では加熱した試料の変化を一つずつ観察。実験中も自然と顔を寄せ合い、「何が起きたか」を確かめ合う姿が微笑ましい


黒板は4分割され、その日の流れがひと目でわかる構成の中1数学。生徒はノートを写すより、問題を解くのに多く時間を割いていた


中3数学では大型モニターの動くグラフと黒板に記述する数式を併用し、両者の対応関係を何度も行き来しながら理解を深めていた

150年積み重ねた「学びの流儀」が県千葉の伝統

こうした自律心と豊かな言語能力の土台の上で、生徒たちの進路選択や挑戦の場も広がりを見せている。増田校長は満面の笑みを浮かべながら、こう明かした。

「Tazaki財団をご存じですか？ 理事長は高卒後にイギリスに留学し、三菱や住友商事の現地法人で活躍され、その後起業してかなりの成功を収めた方なんです。この財団は年間10名程度の高2生をイギリスの寮制高校へ転学させ、現地の大学への進学も全面的にサポートしてくれる、という奨学金プログラムを運営していますが、本校の男子生徒が第9期生に選ばれ、昨年から渡英してるんですよ」

財団のサイトの選考プロセスを読むと、高1で全国の錚々たる提携校から推薦を受けた応募者がまず、国内で語学研修を受けられる20～30人まで篩（ふるい）にかけられる。そして、約半年間の研修を経て、現地に送られる留学奨学生が5～10人にまで絞り込まれる。増田校長自身、やはり高校の英語教師だった父親に連れられ、中学時代に2～3週間イギリスを旅した経験を持つ。

まさに〈可愛い子には旅をさせよ〉。今年4月で留学し8ヶ月になる男子生徒はサイトに留学報告書を寄せているが、そこで現地で重ねた様々な「失敗」について触れ、それが「成功の元」という意味がわかった気がすると綴る一方、人生の「どの瞬間にも失敗と成功の可能性が等しく残されている」と、若者なりの達観を示す。

「特に中学の生徒たちを見ていると無邪気な一方で、きちんと自分の言葉を持っている。理科の実験などでも口ぶりが大人っぽくて賢いんです。授業でも先回りしてノートを取ったり、大人のような言葉でやり取りしたりするから、教員側もちゃんと正対しないといけない、難しさと面白さがありますね」

この「難しさと面白さ」のせめぎ合いは公私立問わず、全国のトップ校で教鞭を執る者全員が味わう感慨だろう。そして、校長室を後にし、さっそく案内された教室で目にしたのは、まさに校長が口にした「解像度の高い」授業の光景だった。

失敗の中にこそ宿る、確かな検証への識見

最初に足を運んだのは中1の理科の実験授業だ。この日のテーマは「白い粉を加熱したときの変化を調べ

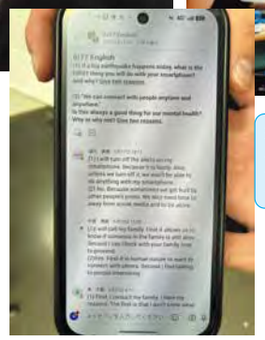
鈴木隆祐／ジャーナリスト。1966 年長野県生まれ。雑誌編集者を経て、執筆活動に入る。「主役は生徒、授業は命」をモットーに、全国の中学高校の取材を続けている。『名門高校人脈』（光文社）、『名門中学 最高の授業』（学研）など著書多数。





中1英語はALTとの掛け合いもテンポ良く進行。身近な話題を交えながら教室全体が自然に英語へ入り込む。それが中3となると、生徒がより主体的になり、素材の単語から雑談を繰り広げる瞬間も





提出された英作文は瞬時にクラス全員で共有。互いの表現を見比べながら、「こんな言い回しも使える」と気づきを広げていく

る」。目の前に用意されたのは、見た目では区別のつかない4種類の白い粉末（実は砂糖・食塩・片栗粉・小麦粉）だ。

水への溶け方や見た目を観察した後、燃焼さじで直接加熱したり、発生した気体を集気びんに集めて石灰水の変化を調べたりしながら、有機物と無機物の性質の違いを自力で見分けていく。

担当の藤澤隆次教諭は、昨年、〈「複合知」で問題発見・解決する能力を備えた人材の育成〉という研究テーマで、武田科学振興財団の「中学校理科教育振興助成」に採択された。藤澤教諭は実験の狙いをこう語る。

「単に知識として答えを知るだけでなく、より確かさを得るにはどんな実験・検証をすべきなのか。そのプロセスを自分でつかんでほしい」

ガスバーナーに火が入り、実験室の温度がじんわり上がる。砂糖を載せたさじが熱せられ、甘く香ばしい匂いが立ち込めると、「カラメルだ！」と興奮気味に声を弾ませる生徒たち。校長が語っていた通り、議論や言葉の端々に大人びた賢さを覗かせる彼らだが、実験の現場は教科書通りにいかないドラマの連続だ。

本来は粉末を直接燃焼さじに載せて加熱すべきところ、國雲春輝君の班では、水への溶け方を調べた水溶液を燃焼さじに移し、そのまま火にかけてしまっていた。

「蒸発したと思ったら、急に燃え出して……。理科は好きなんですけど、小学校の頃に習った、水を蒸発させる手順と頭の中で混同してしまいました。焦って結果を求めすぎましたね」

と苦笑交じりに反省する國雲君。異変に気づいた藤澤教諭が近づいてくる。

「水に溶かしたものを加熱するのではなく、粉末のまま加熱して、変化を確かめる実験だよ」

と実験の手順を確認しつつも、頭ごなしに咎めることはない。なぜそんな顛末を迎えたのか、失敗したからこそ見えてくる道理もある。いみじくもTazaki奨学金を得た生徒も語っている。「どんな瞬間にも失敗と成功の可能性が等しく残されている」のだ。

スマートな解を出すことだけが学びではない。迷って失敗を繰り返すからこそ、そこから「なぜ？」が浮かび上がってくる。その「なぜ」を突き詰めて、通説に誤りがあれば修正していく。それが学問だ。

続いて見学したのは中学1年と3年の数学。中1を担当する西宮希教諭の教室の黒板は4つに大きく線で区切られ、当日の授業の課題がつかみやすい。この日のテーマは「文字式の利用」。歩合や百分率、利益の計算といった一見ややこしい文章題を、割合の仕組みを図や表で整理しながら一つひとつ解説していく。

途中、 西宮教諭は古代ギリシャの数学者のディオファントスの墓碑の話を始めた。墓碑には「人生の1/6を少年として過ごし、さらに1/12を青年として過ごし…」と人生の軌跡が刻まれている。これらの情報をもとに計算すると彼の没年が求められるという、有名な逸話である。このエピソードは、文章に含まれる情報を文字式や方程式に置き換えて考える面白さを示すものとして知られている。





「国府台」「国分」など千葉県内の地名を手掛かりに、律令国家を身近な歴史として読み解く中2社会。地元を入口に古代史への興味を広げる授業だ

小学校では習わない方程式だが、教諭の問いかけに生徒から「あ、それYouTubeで見た！」と声が上がる一幕も。様々な名門校を取材し感じるのは、多くの生徒が好奇心に導かれ、増田校長も指摘するよう、自発的に「先回り」することだ。

かなりのピッチでプリントの練習問題を解いていくが、「手に余裕ができたら宿題を出すよ」という西宮教諭のフランクな一言に、生徒たちも苦笑しつつペンを走らせていた。

一方、中3の櫻井克柔教諭による授業では、高校数学にもつながる二次関数を扱うのに、動的数学ソフト「GeoGebra」を活用。無償提供され世界中で1億人以上のユーザーがいるとされるが、教室で使われるのを見るのは初めてだ。数字や範囲のパラメータを動かし、グラフの形や軸の位置、最大値・最小値がどう変化するのか、いわゆる「関数の挙動」を画面上で動かしながら見せていく。一方で櫻井教諭は黒板にもグラフを描き数式を記し、丁寧な解説を加える。

式を見ただけではピンと来ない関数の複雑な動きも、画面で動くグラフを見ることで直感的に理解しやすくなる。黒板に書かれた数式と、画面上でダイナミックに動くグラフ——2つの情報を巧みに行き来しながら、生徒たちは難解な二次関数の醍醐味を淀みなく会得していた。

正解を急がない。その余裕が本物の思考力を鍛え上げる

高度な教材×Teamsで挑む 生きた英語の発信力

次に英語の授業へ向かう。 中1は滝口通史教諭とALTによるダブルティーチングだ。教材には私立進学校でよく使われる『NEW TREASURE』（Z会）を用いていた。公立中でこの高度な教材を使えるのは、県千葉のハイレベルな授業とそれについてくる生徒達の存在があるからだ。副教材には『チャンクで英単語』（三省堂） を併用。 授業冒頭、 副教材から「Let the children play」といったフレーズをテンポよく唱和させ、意味の塊（チャンク）で英語を捉える感覚を身につけさせる。

今回のリーディングで扱う『NEW TREASURE』の「Lesson 4 Read」は、米ワシントンD.C.にあるスミソニアン国立動物園が登場する章。本文に出てくるゾウやパンダ、ヒョウの生態を追う際、教諭は「Have you seen the animals at Ueno Zoo?」と身近な例に置き換えて解説する。教科書中の「三単現のs」や疑問詞（Where/When）のルールをただ暗記させるのではなく、実際の動物の様子を思い浮かべさせながら、自身の言葉で状況説明できるよう繋げていた。

一方、中3はグラマーで担当はこのクラスの担任でもある田口楓教諭。黒板に書かれた「force（～に・を強いる）」の解説から、教室は一気に盛り上がりを見せる。映画『スター・ウォーズ』に出てくるあの「フォース＝理力（見えない力）」のことだ。「ヨーダがよく言っている！」と嬉しそうに話してくれたのは米山日鞠さん。

「日本語吹き替え版で観ただけですが、兄姉がよく字



授業中にプリントにまっしぐらだった宮崎慶仁君を、休み時間にクラスメートが笑顔で囲む。互いを認め合う空気が、教室全体の明るさにつながっている

幕版を観ているので、次は私もチャレンジしてみたい」と声を弾ませていた。馴染みのある映画のキーワードや台詞と結びつくことで、単語のニュアンスが実感を伴って伝わるのは、中学に上がって以来の“映画の虫”である私には身にしみてわかる。

さらにこの授業で印象的だったのが、ICTツール(Microsoft Teams)を使ったクラス全体での意見共有だ。生徒が端末から提出した「災害時にスマホで最初にすること」といった即興の英作文が、提出するとすぐに全員の端末画面に一覧で並ぶ。

今までのようにノートをいったん教師が回収し採点・評価の後に返してもらうというやり方だと、他の生徒がどう書いたかはわからない。しかしここでは、クラスメイトがどんな表現を使っているかがその場でひと目でわかる。互いの作文を見比べながら、「こんな言い回しもあるのか」とすぐに参考にでき、生徒同士が学び合うピア・ラーニングとしても非常に効果的な仕組みだと感じた。

身近な歴史を発見する社会と活気溢れる国語

中2社会は歴史分野。越川隼人教諭が投げかけたテーマは「律令国家の成立」だ。越川教諭はまず、当時の役所の名残が全国の地名に残っていると指摘する。

「市川市の国府台があるでしょ。かつて下総国の国府が置かれていたことが由来で、千葉には同じような地名がわりに多いんだよね。同じ市川に国分という地名が残っているけど、下総国分寺が置かれたことから来ている」

房総半島南端の安房地方も四国の現在の徳島、阿波(粟国)から移住した一族が麻を植えたのが地名の由来とされるが、律令制とも大きな関わりを持つ。越川教諭は流暢に説明を続ける。

「資料集にもある通り、平安時代の『延喜式』にも載っているが、安房の特産品だったアワビが奈良時代には重要な租税として国家に納められていた。その証拠に平城京跡からは、安房の地名が書かれた木簡が多く出土している。当然アワビを生のままで都まで運ぶ技術はなかったので、塩漬けにし短冊状に切って干して捧げられていたんだけどね」

これがいわゆる熨斗(のし)アワビ。現在祝儀に使われる「熨斗袋」の由来である。身近な千葉の歴史と古代国家の税制にかくも強い結びつきがあると知り、生徒らも目を輝かせていた。

続く伊藤渉教諭による中2国語は口語文法の助動詞の識別に関し、プリントで学習を進めていた。

「プリントの例文に『女性らしい態度』と書いてしまったけれど、ジェンダー的に難があったかな」

飛び込みで取材に入ったため、狼狽えた伊藤教諭が反省気味に話す場面も。その直後、2枚目に配られたプリントにすかさず書き込みをしていた宮崎慶仁君にカメラを向けると、周りから一斉に歓声が上がる。

休み時間になると、被写体となって照れる宮崎君を囲んで、「さすが慶仁!」とワイワイガヤガヤ賑やかな輪ができた。実は最近の数学の小テストで学年1位となり、廊下の壁に順位が貼り出されたばかりの有名人。華奢な印象だが、これでサッカー部では守りの要のセンターバックを務める。

「テストではケアレスミスを出さないように意識しました。同じクラスにライバルがいるんですよ。廊下に1位と貼り出された時はやっぱり嬉しかった」

見た目とのギャップと、飄々とした語り口の中にも覗く、芯の強さがすでにして県千葉生らしい。

さて、充実の給食タイムを終え、午後の校内を回りだすと、1年2組の教室から賑やかな英語のトークが聞こえてくる。しかし、この授業は意外にも道徳だ。副担任の保月友美教諭の投げかけたテーマは「節制・節度」。教諭の専門は英語で、ポップなイラスト入りのフリップをモニターに映しながら、「人生で4回溺れたことがある」と自身の体験談を英語混じりに語り始めた。

“The first time is... Bath.”(2歳頃、銭湯で)

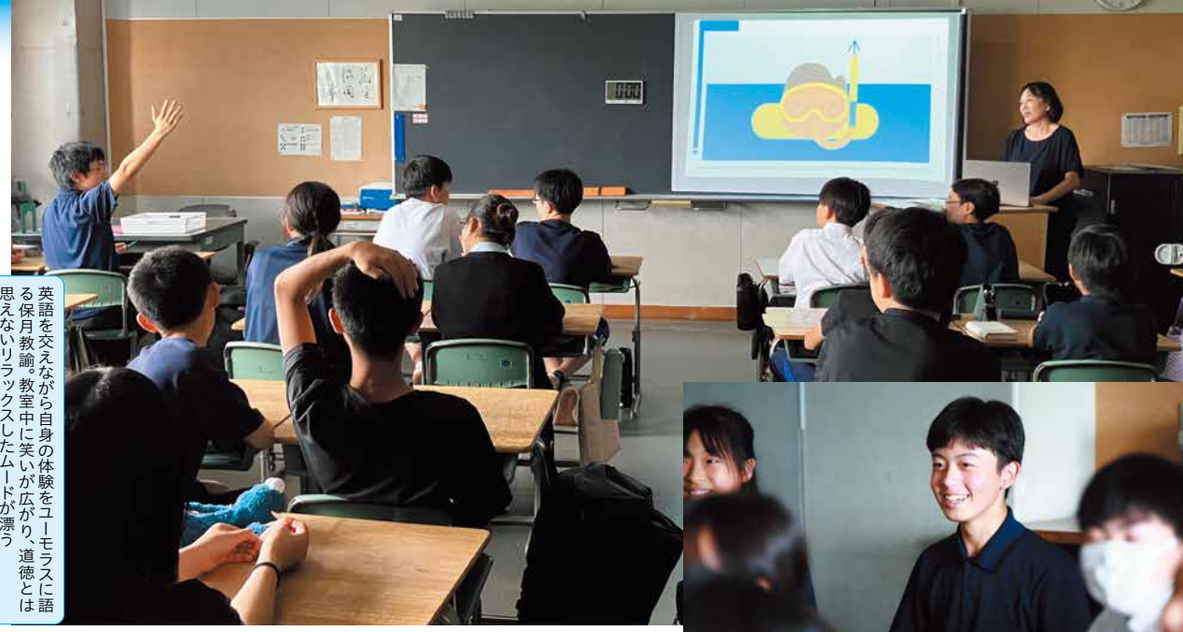
“The second time is... Snow.”(4〜5歳、雪に覆われた水路で溺れた犬を助けようとし)

“The 3rd time is... Beach.”(小学生時代、海水浴場で溺れかけた妹を助けようとし)

“The 4th time is... Snorkeling..”(30代、シュノーケリング中にシュノーケルの不具合で)

教諭がポーカーフェイスで繰り出す、やや自虐的な災難ネタに対し、生徒たちは「普通なら死んでますよ」などと容赦なくツッコミを入れる。実にテンポの良いボケとツッコミの応酬に、教室は終始大爆笑。すっかり雰囲気が温まったところで、授業は教科書中の『疾走、自転車ライダー』の読み込みへと進むのだ。

知識は数珠のようにつながり、自らの表現へと姿を変える



英語を交えながら自身の体験をユーモラスに語る保月教諭。教室中に笑いが広がり、道徳とは思えないリラックスしたムードが漂う

《主な大学合格実績》

国公立大学名	2026	2025	2024
東京大学	22	21	21
一橋大学	11	14	8
東京科学大学	13	18	
北海道大学	2	5	4
東北大学	12	12	10
筑波大学	9	15	11
千葉大学	32	41	37
横浜国立大学	3	7	2
京都大学	12	12	10
大阪大学	4	5	5

私立大学名	2026	2025	2024
慶應義塾大学	87	92	94
早稲田大学	152	149	116
上智大学	65	55	37
東京理科大学	164	136	130
明治大学	119	127	96
青山学院大学	28	32	17
立教大学	36	44	35
中央大学	59	61	62
学習院大学	7	18	10
法政大学	43	59	40

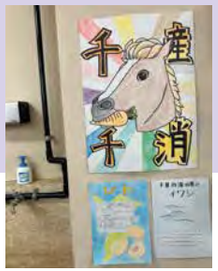
食育と地域の味を堪能する、千葉中の給食タイム

千葉の県立中学は千葉中と東葛飾中の2校のみ。両校の給食は専属の栄養教諭が献立を作成し、調理や配送を民間業者へ委託するデリバリー方式で提供される。地産地消や季節感を意識したバランスの良い献立が特徴だ。

この日の献立も一鶏肉と野菜の揚げ煮・ナムル・青のりひよこ豆・春雨スープ・ご飯・牛乳・りんごゼリーと実に盛りだくさん。昼休みになると生徒たちは、かつて定時制の生徒が利用していた食堂へと移動。3学年が一堂に会し温かい料理を囲みながら、和気藹々と会話を弾ませる給食タイムは午後の授業、放課後の活動を乗り切る活力源だ。













高２工芸では計画書に基づき、独創的な陶芸に取り組む。工芸室の奥には大小2基の電気窯を備え、素焼きから本焼きまで校内で完結できる環境を整備。焼成を待つ作品が並び、生徒たちの創作への意欲が底からも覗く







おどろおどろしい妖怪画に英字の切り抜きを重ね、箱も鮮やかなブルーで彩色したコラージュボックス。この違和感がたまらない



盤脇に解説書を開き、駒の手順を一つひとつ検証。地道な研究が県有数の将棋強豪校を支えている



手前には先輩が残したという貴重な方向幕、手には文化祭で無料配布される渾身の部報。〝鉄ちゃん〟の熱量がビシバシ伝わる



楽譜を手に指揮へ真っ直ぐな目線を送る。パートごとの緻密な声の重なりを繊細に確かめつつ、見事な唱和を聴かせる

こうした中学での伸び伸びとした学びの先に、どんな表現力が育つのか。最後に訪れた高校の工芸室・美術室では、県千葉生の創造的な地力が遺憾なく発揮された授業が展開されていた。

理論と計画が紡ぎ出す、高2芸術の表現力

高2でも芸術は選択必修で、音楽・美術・書道・工芸の4教科から選ぶ。

まずは工芸教室へ。担当の花里卓朗教諭は武蔵野美術大学で油絵と版画を専攻した大ベテランだ。かつての赴任校で工芸教諭に欠員が出た際、たっての依頼を受けて免許を追加取得した異色の経歴を持つ。

板書や工程管理表、指導計画ファイルを見ると、それぞれがきめ細やかで驚かされる。制作の手順や締め切り、粘土の固さや削りの時間管理までが徹底的に言語化・数値化されているのだ。花里教諭は語る。

「感覚だけに頼るのではなく、計画性を重んじなければ。いったん素焼きをし、また釉薬をかけて焼く。工芸である以上、生活の役に立つものを作らないとね」

課題は陶芸のカップ＆ソーサー。四字熟語をモチーフとするのがユニークだ。プランシートに「粉骨砕身」と記した鎌田唯愛さんは、自身の発想を形にする上での工夫を明かしてくれた。

「取っ手をハンマーの形にして、ハートが粉々に砕けたデザインにしました。『骨』の字も入っているのでソーサーで骨を表現しています」

「好き」を極める放課後が、探究心をさらに深める

綿密な計画があるからこそ、生徒たちの豊かなアイデアがぶれずに器へと昇華する。

隣の美術教室でも、独自の表現が花開いていた。担当の長澤珠恵教諭が取り組ませているのは、箱の中に紙などの素材を組み合わせ、作り手独自の世界観を表す「コラージュボックス」だ。

「長い間、美術教育は感性重視の方向にあって、それゆえに苦手意識を持つ生徒もいましたが、優れた作品は実は理詰めでできているものなんです」(長澤教諭)

「浮世絵が好き」という前原英那さんが題材に選んだのは、江戸後期に描かれた葛飾北斎や歌川国芳らの妖怪画だ。ウェブから画像を拾いプリントアウトした。

「でも、それだけだとどんよりしてしまうから、ギャップを狙って、あえて英文字のタイポグラフィを散りばめ、ポップにしてみました」

おかげで“怖い浮世絵”が見事に可愛らしく映える。そして、コラージュ本来の意図である、別の意味合いや特殊な視覚効果が生み出される。しかし、これもアイデアスケッチの段階から、構図や色彩をロジカルに計算し手繰り寄せた結果だ。感覚だけに任せない、確かな探究心と計画性を通じて、生徒たちは自分だけの美を伸びやかに形にしていた。

そして、放課後は部活を回る。取材日はたまたま運動部の活動をあまり見られず、文化部ばかりの紹介になるが、弓道部はこれまで全国・関東大会に出場してきた強豪で、昨年度は県大会兼東日本大会県予選で男子団体は堂々の1位、陸上部でも昨年は関東大会出場を果たしたメンバーがいる。文武両道は創立以来からのモットー、と強調させてもらいつつ、いくつか文化部の活動を追ってみた。

音楽室の合唱部は、7月頭に控えた葛城会(OBOG会)での披露に向け、「浜辺の歌」や「椰子の実」といった大正・昭和の名歌6曲を練習中だった。普段から中高合同で活動しており、この日も高校生に混じって、中学の女子生徒が朗々と歌っていた。少人数ながらも混声合唱の醍醐味が存分に感じられる丁寧で伸びやかな歌声が、静かに胸に沁み込んでくる。

将棋部の教室では、将棋盤を挟むペアだけでなく、定跡書と首っ引きで黙々と「一人対局」に没頭する姿が目を引く。いかにも進学校らしい探究心だ。昨秋には初心者で入部した女子生徒が県高校新人大会の女子個人戦で入賞を果たし、関東大会へ駒を進めるなど、新たな風も吹き込んでいる。

鉄道研究会では、黒板に書かれたダイヤの時刻表から駅名を当てるクイズに筆者も挑戦。幾度もヒントをもらいながら正解にたどり着き、思わず胸が昂った。夏休みに予定している東北への研究旅行は現地集合・現地解散。観光には目もくれず、ひたすら列車に乗り続ける過密な旅程の計画に、鉄研ならではの熱量が溢れていた。

授業で培われたロジカルな思考や計画性は、こうして放課後の部活動にも地続きで息づき、自分の「好き」や追及したいテーマに対し、生徒はとことん没頭できていた。そして、それこそが県千葉生が持つ底力なのだと実感するのだ。

《沿革》

1878年　千葉師範学校構内に千葉中学校として創立
1899年　千葉県千葉中学校と改称
1948年　学校教育法により高等学校となり、千葉県立千葉高等学校と称する
1949年　男女共学制を実施
2004年　県立高等学校再編計画第2期実施プログラムにより、県立千葉高等学校に新たに県立中学校が併設されることになる
2008年　千葉県立千葉中学校開校

《概要》

生徒数:1195名(内中学校239名 高校956名)
住所:千葉県千葉市中央区葛城1−5−2
交通:JR内房線・外房線 本千葉駅 徒歩10分　京成千原線 千葉中央駅 徒歩15分　千葉都市モノレール 県庁前駅 徒歩9分

《主な出身者》

松田学(参議院議員) 橋本幹彦(衆議院議員) 志位和夫(日本共産党議長) 畝本直美(検事総長) 渕上玲子(日弁連会長) 喜勢陽一(JR東日本社長) 海堂 尊(作家) 塩田明彦(映画監督) 岩田明子(ジャーナリスト)